

自分事として捉えて行動変容につなげるために ～OODAループで考えよう～

渡部 寛矢

はじめに

附属池田小学校(以下本校)には、安全科がある。安全科では、安全に過ごすために、「わかっているけど、できない」から「わかっているから、できる」という行動変容を促すことを目指している。子供たちは、安全科で学ぶことそれ自体はすでに知っていることも多い。しかし、それが行動につながっているかといえばそうではない実態がある。「子供とつくる学び」を実現していく上で、子供たちがいかに自分事として安全科の学習を捉え、行動に移せるかが大きな課題と言える。今回は、「安全な歩き方」の学習の中で、自分事として捉えられるようにするために、「OODAループ」という思考法を授業に取り入れることにした。

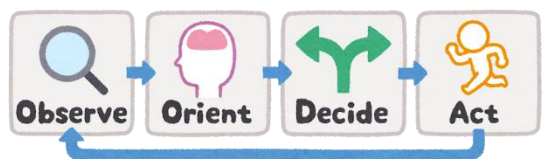
「OODAループ」とは

OODAループは、「O:Observe(見る)」「O:Orient(わかる)」「D:Decide(きめる)」「A:Act(うごく)」の4つを指す。入江氏によると、『OODAループは、アメリカの空軍大佐のジョン・ボイドが提唱した、敵に先んじて確実に勝利するための基本理論です。当初は、戦闘機パイロットとしての経験に基づいた、まさに一瞬の戦闘に勝つためのものでした。しかし、その後ボイドが諸科学の知見を取り入れて汎用性を持たせた結果、OODAループは戦略、政治、さらにビジネスやスポーツにまで広く活用され、「どんな状況下でも的確な判断・実行により確実に目的を達成できる一般理論」として欧米で認められるようになりました。』とある。※1

つまり、OODAループは、瞬時に判断して対応することに特化した思考法である。では、なぜこの思考法を学ぶ必要があるのだろうか。

安全科では、領域ごとに具体的な事例をもとにして「どのようにしたら安全であるか」、「どのように行動したらよいか」などを考えることが多い。たしかに、知識を獲得することや対応方法を考えることは必要である。しかし、それだけで十分なのだろうか。授業の中でも、何気なく「臨機応変に対応する」という発言やまとめ方を目にするし、私自身、そのように指導することもあった。とはいえ、「子供たちは、本当に臨機応変に対応することができるか」といった視点や「臨機応変に対応するために、知識の獲得だけで十分なのか」といった視点が抜けているように思う。臨機応変に対応することこそ、身を守る上で一番重要なのではないだろうか。そのように考えたとき、OODAループ思考法を身に付けるができれば、児童もより安全に過ごすことができるのではないかと考え、「OODAループ」を安全科で扱う単元を計画した。

「OODAループ」の図



単元を計画するにあたって

本校の安全教育カリキュラムでは、2年生で歩行者の立場から、安全な歩き方を学習する。内容としては、事故の起きやすい場所の安全な歩き方を知る

ことやすれちがう場面での対応などがある。今回、OODAループ思考法を身に付けてより安全を確保できるように、OODAループの中でも「O:Observe（観察）」を意識して行うことを目標として単元を計画した。

本来、OODAループでは、「O:Orient（わかる）」が一番重要なプロセスである。というのも、見たことや気づいたことを自分なりに受け止めて、理解することなしに判断したり行動したりしないからである。しかし、その理解は、単に自分が見たり気づいたりしている客観的な情報だけではなく、自分のこれまでの知識や経験といった世界観が大きい。低学年の児童にとって、経験や知識が少ないからこそ、より客観的な情報の占める割合が大きくなる。そこで、「O:Observe（観察）」、つまり、よく「みる」ためのスキルを身に付けることで、臨機応変に対応しやすくなり、より安全な歩き方に繋がると考えた。

なお、低学年児童（6歳～8歳）は、歩行中の事故における年齢別の死傷者数が一番多い。保護者の目が行き届かなくなり、自分で安全を確保しなければならぬが、知識や経験が不足し、危険の予測が十分にできないことが原因の1つとして考えられる。こういった点からも、安全な歩き方に関わる知識を学ぶことだけでなく、よく「みる」ことが必要だとわかるのではないだろうか。

○単元計画

- 1 駅から学校までの道を歩き、歩いているときに危険なところを探す。
- 2 見つけた危険なところから、安全な歩き方とは何か考える。
- 3 「みる」ことを意識して、より安全に歩く方法を考える。★本時

実践報告 「安全な歩き方」 ～OODA ループで考えよう～

①安全な歩き方を知る～第1・2時より～

本校は、校区が広く、地域も異なるが、電車通学の子供が多いので、今回は学校から駅までの通学路を学年でフィールドワークすることにした。そうすることで、全員で「どこが」、「どのように」危険なのかを共有し、第2時で安全な歩き方とは何かを話し合うための前提条件をそろえることにした。

想定通り、普段その道を通らない子供は、移動しながら「ここが、この前先生が言っていた事故が起きた交差点だね」などと危険な場所を確認している様子が見られた。それだけでなく、普段登下校で通っている子供も、「ここも危ないかもしれない」と改めて意識して見ることができていた。

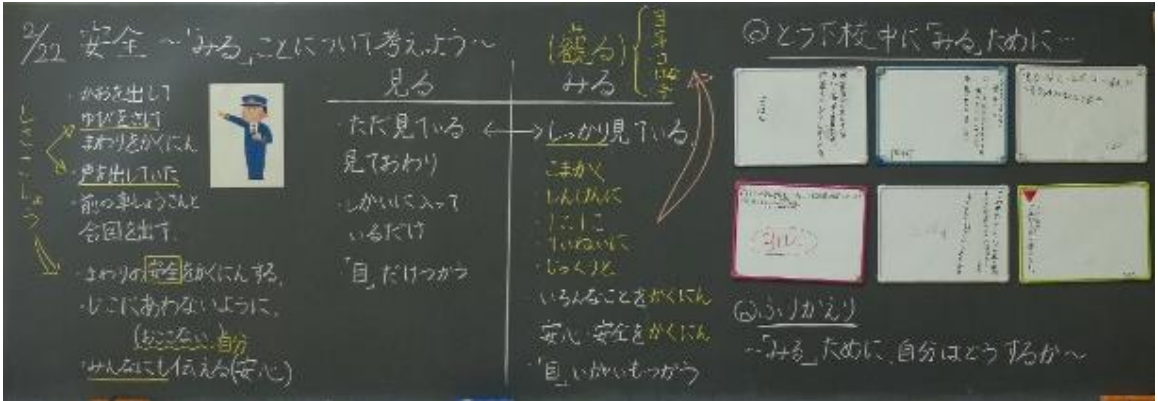
今回は、各班に1台 iPad を渡して危険だと思われるところを撮影した。第2時では、その写真をもとに危険な場所はどこか交流し、安全な歩き方とは何かを考えることができた。

フィールドワークの様子



子供が撮影した危険だと思う場所の一例





②よく「みる」ことを意識する～第3時より～

まず、導入で駅員さんの「指差呼称」の様子を動画で見せた。指差呼称を取り上げた理由は、意識してよく「みる」ことが最もわかりやすい事例だからである。電車の停車位置にずれはないか、ドアの開閉ランプは消えているか、ホーム上に異物がないかなど、チェックすべきポイントを1つ1つ指差しながら、声を出して確認する様子がわかるものを見せた。動画を見せてすぐに駅員さんが何をしていたかを問うと、子供は指差呼称の意義にまで言及することができていた（板書左側）。

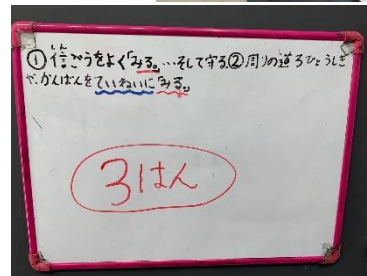
そこから、「みなさんは、ふだんから安全確認するとき、（指差呼称の動作をしながら）こんな風しますか。」と問うたときに、「やっていません。」と子供たちは発言をしたので、「では、みなさんが普段している安全確認と駅員さんたちがやっている安全確認の違いは何か考えよう。」と授業の展開に入った。

最初に、「見る」と「みる」の違いを丁寧に説明した（子供たちが、普段何気なく行っている見方を「見る」、指差呼称のように真剣にしっかりと意識したものを「みる」とした）。それから、何が違うのかをワークシートに書くように指示をした。「見る」と「みる」は同音なので、児童が考えにくいことが想定される。そこで、「みる」は生活科の観察に近い

と説明を加えた。クラスでは、観察する際、五感を使って細かく観察するように指導しているからである。生活科での学びがつながり、比較しながら自分の言葉で考えた意見も多く挙がった。（板書中央）

その後、子供たちに「登下校中に指差呼称を試みてはどうか。」と問いかけた。「できない」となったので、「じゃあ、どうしたらいいのかな。」と、子供たちが第1時に撮った写真を配って、意識して「みる」方法をグループで考え、ホワイトボードにまとめるように指示した（板書右側）。

グループワークの様子



グループワークで出した意見

上の意見を見ると、自分事として考えることができたのではないかと思います。ルールを守ることが大事、ということろしか意識できていなかった子

供たちが、「みる」ことの重要性を挙げられているからである。他にも、「小さな声と小さな声出し」や「心の中である」といった自分事として考えてできる方法が挙がった。いつも周囲から情報を集めようとする意識の高まりが、グループワークや全体交流の場面で多く見られ、「これならできそう」というアイデアを出せていた。

児童の振り返りの一例

「みるためには、自分は、ただぼおと見るわけではなく、ま
かくしけんしににいねいにみたり五かんを大事に
して、自分も他人も大事にして、守ってあげながら帰った
りしたいです。おれは、小さな声で小さな声を出したいです。
りゆは、安全ではずしくないよに、小さな声でいいと思ったが」

見るどみるのちがいを知りました。意きして見るのと
ただまんにその物が自分から見える所にまの
では、全せとちがうと思ひました。自分がみる
ためには、ふたへからそれを意きして
なれる事だと思ひます。

ふりかえりの場面では、グループワークや全体交流の場面を通して、授業内容や友達の考えに共感し取り入れようとする姿勢が見られた（青線は、クラスの他の友達の意見で、赤線は、自分のできること）。「周りをよく見て歩きましょう」とまとめてしまうことで、わかったつもりになって、実践につながらないのでは不十分である。自分で判断して決めたからこそ、ふりかえりの場面での子供たちの押さえ方も一人ひとり違うものにはなり、その日から自分で考えた方法を実践して帰ろう、と帰り際に嬉しそうに話してくれる子供の姿につながったのではないかと考える。

実践を終えて

授業内容を通して短期的な行動変容に繋がったように感じる。それは、実践後しばらくして、下校指導に行っている際、下校の仕方に改善が見ら

れたからである。子供たちにとっても下校の仕方の改善を感じているようで、一人の子供が、「1年生のころよりマシになった。」と私に言ってくれたことがあった。「マシになった」という言葉から大幅な改善ではないのかもしれないが、行動変容があったからこそその発言だと考える。とはいえ、中・長期的な行動変容は、今後も見ていきたい。

また、実践には課題もあった。OODAループ思考法を理解する上で、1つだけに焦点化して学習することに無理があった点である。「みる」ことによって外部から情報を集めることは意識できるようになったかもしれないが、その得た情報をどうするのか、活用まで学習を深めることができず、結局「周りをよく見る」という知識だけになってしまいかねないからである。臨機応変に対応できるようになるためには、OODAループ全体像を見せる必要はあっただろう。他にも、指差呼称を実際に子供たちが体験してみて良さを実感できる具体的な活動を設定できれば、より意識を高められてよかったのではないかと考える。

おわりに

OODAループは、思考のフレームワークであるからこそ、汎用性が非常に高い。子供たちは、移り変わりの激しい時代を生きていく以上、OODAループ思考法を身に付けることは、安全科以外の教科や分野でも、今後より必要だと感じている。低学年の児童には、少し難しい部分があったかもしれないが、思考の視覚化と同じように、思考の意識化もスキルとして学ぶことが大切なのではないだろうか。

参考文献

※1 入江仁之（2019）『OODAループ思考入門』
ダイヤモンド出版